脱温暖化シンポジウム

低炭素社会実現の可能性を探る

環境の「心・技・体」で温暖化を回避

～生協ひろしまと共催　200人が参加～

シンポジストは、それぞれの立場で「これから何をすべきか」を語った（上）、「心・技・体」が低炭素社会実現のキーワードと語った江守氏（右）

脱温暖化センターひろしまと生活協同組合ひろしまが主催する「脱温暖化シンポジウム」を、六月二十七日に広島市東区民文化センターで開催。

地球温暖化問題に関心を持つ市民や地球温暖化防止活動推進員、事業者、行政職員など約二百人の参加があった。

記念講演は、「地球温暖化の現状と将来予測」と題し、独立行政法人国立環境研究所地球環境研究センター温暖化リスク評価研究室室長の江守正多氏が科学者の立場から気温や降水量などシミュレーションした結果を報告された。

異常気象について、江守氏は、個々のケースについてはわからないが、極端な高温の増加傾向は認められており、温暖化が進めばさらに深刻な異常気象が増加する可能性が高いと指摘。IPCCの報告をもとに懐疑論への問題提起を行い、地球温暖化は、人類にとってはいつかは止めなければならない問題であると述べられた。

シンポジウムでは、当会脱温暖化センターひろしま薦田直紀センター長がコーディネーターを務め、江守氏を含め三人のシンポジストを迎え、それぞれの立場で「低炭素社会を実現するために私たちは何をすべきか」をテーマに議論を行った。

シンポジストの広島修道大学人間環境学部人間環境学科森嶋彰教授は、県内の地球温暖化対策地域協議会の活動事例を紹介し、日本の公害経験に学び、われわれは温暖化対策に立ち向かう力を持っていることを述べられた。

生活協同組合ひろしま横山弘成専務理事は、生協ひろしまの環境保全活動について報告。「地域とともに活動していく」と決意を表明された。

最後に、国立環境研究所の江守氏からは「私たちの心がけ」「温暖化防止の技術」「社会体系」という環境の「心・技・体」が揃い、互いを補完しあえば、低炭素社会の実現は可能であると呼びかけがあった。

（脱温暖化センターひろしま）

TEAM 地域　エコ　アクション　ミーティング

最前線

～その後の脱温暖化物語～

⑬大崎上島けんこう文化の島づくり協議会

手作り紙芝居で出前講座

島全体への取り組みをめざして

大崎上島けんこう文化の島づくり協議会は、平成十七年十一月に公衆衛生推進協議会が中心となり、食生活改善推進員協議会や広島商船高等専門学校、フェリー会社など各種団体と連携して設立された。

橋がかかっていない大崎上島町では、フェリー乗り場は誰もが通る玄関口となるので、まずは、島ならではの、フェリー乗り場でのアイドリングストップキャンペーンを開始した。

平成十九年はお盆、平成二十年にはお正月と、たくさんの人が出入りする時期にステップアップして実施してきた。より多くの人にのキャンペーンも企画中だ。

また、紙芝居を活用した出前講座にも力を入れ始めた。紙芝居のひとつは、構成メンバーの地球温暖化防止活動推進員が作成したオリジナル版を使用している。

タイルの変革を訴えた。

紙芝居は五人のメンバーで配役を分担して読み進め、それぞれが役になりきり熱演し、三才から五才の子どもたち二十

紙芝居を熱演する地域協議会のメンバー

地球温暖化問題やその防止策をPRすることで、島の環境を守るとともに、島で経験したアイドリング・ストップをお土産に持ち帰ってもらい、波及効果を期待している。今年度は船上で

今年度は、島の全てにあたる四つの幼稚園、保育園で実施した。六月二十六日に開催されたルンビニ幼稚園では保護者参観日に合わせて行い、子どもたちのみならず、大人にもライフス

二人は真剣に紙芝居に見入っていた。

会長の梅澤恵子さんは「女性会や食生活改善推進員協議会の総会などの場面を捉えて出前講座を行っているので、次は小学校にも出かけて行き、さまざまな世代の人たちと協力して、島まるごとの取り組みをすすめていきたい」と今後への思いを語った。

地球温暖化防止活動推進員は十二人に増え、活動メニューも広がる大崎上島町のこれからの取り組みが楽しみだ。

（脱温暖化センターひろしま）

未来をつくる学生のエコと心　⑪　渡辺研究室

地域活動を展開する中で、もっと若い力を呼び込めないかと考えたことはないだろうか。学生も自らの成長と未来を考え、活躍の場を探している。このシリーズでは、環境分野で積極的に活動する学生グループを紹介し、地域と学生のコミュニティ形成のきっかけを提供する。

組織名：渡辺研究室
代表者：津山　力
活　動：バイオ・リサイクル
事務局：広島国際学院大学内

米のとぎ汁からエネルギーを精製

育成から燃料化までのサイクルを実践

環境イベントで展示したE10自動車

シリーズ11回目は、米のとぎ汁からバイオエタノールを作るという、廃棄物の有効利用を促す技術開発、実験を実施している広島国際学院大学のバイオ・リサイクル専攻渡辺研究室に所属する津山力さんら4人にお話を伺いました。

■「渡辺研究室」とはどのような組織ですか

3年生、4年生それに院生を合わせておよそ20人でバイオエタノールの精製やその使用の研究を行っています。各自、濃縮技術や実験機の開発、コストダウンの模索などを研究するほか、お祭りなどのイベントでの広報にも力を入れています。また、大学環境ネットワーク「UE-net」にも加盟しています。

■活動紹介

これまでお金をかけて処理していた廃棄物に少し手を加えることで有用物を作り出す技術開発と、廃棄物の削減を目指して非食用材である米のとぎ汁からバイオエタノール精製を行っています。

精度や効率を上げる研究だけでなく、実際に多収穫米を植え、育成から収穫、そして燃料化、最後に使用という循環サイクルの実践にも取り組んでいます。

精製したバイオエタノールは、研究室で作成したバイオエタノール対応自動車の燃料などに使用し、出張環境学習活動の目玉としています。

現在、公道走行が可能な2台目の車両を環境学習用に作成中です。バイオエタノールは燃料のガソリンに対して3%（E3）を混ぜて使用します。今後、規制の変化に合わせエタノール量を増加させていきます。

■活動への意気込みを教えてください

各家庭でバイオエタノールの精製は無理ですが、一人ひとりが地球環境のためにできることを考え、実践してほしい。私たちはそのきっかけをバイオエタノールという切り口から提供していきたいです。　（地域支援課　馬場田真一）

住宅用太陽光発電導入支援対策費補助金　広島県窓口に当会指定

地球温暖化問題が深刻化する中、石油代替エネルギーとして太陽光発電の飛躍的な普及が望まれる。そのなかで、住宅用太陽光発電の普及に向けて国として支援策を講じることとなり、経済産業省が補助制度をスタートさせた。この制度は、一定の要件を満たす住宅用太陽光発電システムを設置する者に対して、定額の補助を実施するもの。有限責任中間法人太陽光発電協会／太陽光発電普及拡大センター（J-PEC）が運営し、全都道府県に窓口団体が指定されている。補助制度の概要の主な点は右図の通り。

※補助金交付には、条件がございます。詳しくはJ－PECのHP（URL：http://www.j-pec.or.jp）もしくは、当会へお問合せください。

制度の概要

- ●募集期間：2009年4月1日～2010年1月29日
- ●補助金額：太陽電池モジュールの公称最大出力　7万円/kW
- ●対象者：自ら居住する住宅に対象システムを新たに設置する個人で、電灯契約をしている方
- ●対象システム：J－PECの規定、最大出力が10kW未満システム価格が70万円（税抜）／kW以下を満たすこと
- ●申請方法：都道府県別の受付窓口に申請書類を提出

問合せ先：〒730-8631　広島市中区広瀬北町9－1
（財）広島県環境保健協会　地域活動支援センター　TEL：082（293）1505（ﾀﾞｲﾔﾙｲﾝ）　FAX：082（293）1524